

パネル

フロアからテーマの本質に関わる質問を提出して下さった方々、そして二時間にわたるパネルに熱心に参加して下さった多くの方々に、改めて感謝申し上げます。

宗教とエコ・フィロソフィ

——東洋の宗教伝統を中心として——

代表者 渡辺章悟

コメンテータ・司会 吉田公平

ヒンドゥー聖地と環境問題

宮本久義

世界的な環境問題への取り組みの影響下、昨今インドにおいても環境問題に多大な注意が向けられるようになった。本発表は北インドのガンガー（ガンジス川）の流れるヒンドゥー教聖地ヴァーラーナシー（別名バナーラス、ベナレス）を例として、その取り組みの過程を検討し、その特徴と問題点を探るものである。

ヒンドゥー教は本来自然に対する高い環境意識を持っていた。特に水に関する自然観にそれはよく表れている。インダス文明の時代からインドでは沐浴が重んじられていたと考えられ、またヴェーダ聖典の創造神話でしばしば説かれる原初の水あるいは海とは、あらゆるものを生み出す母胎（マトリックス）と考えられていた。さらに、ヒンドゥー教の思想や神話では、水の特性あるいは力を示すのにさまざまなアナロジイが使用されている。水が羊水や精液とのアナロジイとして語られるとき、それは限らない生産力を示している。牛乳とのアナロジイ

ーは滋養力と慈母性を示している。さらに水には神秘的な治癒力・変身力があるとされた。そして庶民にとっても重要なのは、宗教的浄化力である。聖地で沐浴することによって、それまでに蓄積された罪障が浄化されると考えられたのである。サンスクリット語で聖地を表す言葉「ティールタ」は川の浅瀬などを意味するといわれるが、通俗的語源解釈では、此岸から彼岸へ渡る場所、すなわち天界に通じる場所なのである。プラーナ聖典のなかには聖地の縁起や巡礼案内を説く「マーハートミヤ」(威光書)文献が含まれるが、いくつかある「ヴァーラーナसीー・マーハートミヤ」文献では、ガンガーは繰り返し尊崇され、まさにガンガーの存在が聖地の環境保全に役立ってきたことが伺える。

しかし現在、インドは猛スピードで近代化を推し進めている過程で、ガンジス川に流れ込む工場廃水などの問題も生じている。宗教的な意味で優れた浄化力を持つとされるガンジス川も、知らないあいだに水質汚濁が進んでいる。一九七〇年代半ばからそれに気付きはじめた人々が、八〇年代に入って浄化運動に取り組みはじめた。一九八二年に「清浄なるガンジス運動」(ガンガー・スワッチュ・アビヤーン)を開始した民間団体のサンカト・モーチャン財団の代表者ヴィールバドラ・ミシユラ氏は、寺院の管長であるとともに、当時大学の工学部教授であった。宗教者と科学者という両方の立場に立つ氏は、この問題に警鐘を鳴らし、音楽会などの集会を開いて水の大切さを再認識させる努力をしてきた。このような民間の運動に呼応して、政府も浄化プロジェクトを立ち上げた。ラージーヴ・ガー

ンディー元首相は「中央ガンジス川公共事業機関」を設立し、ガンジス河川環境破壊の修復のために「ガンジス川行動計画」(Ganga Action Plan)が開始された。また最近では、ユネスコの世界遺産に「ガンガー川と河岸およびヴァーラーナसीーの旧市街遺産地区」を登録しようとする運動も立ち上げられた。

古来、環境保全の対象と意識されてきたはずの聖地が汚染されたのには様々な要因がある。人口増加による生活廃水、無規制な工場廃液、意識的取り組みへの無関心などが複合的に関係しているであろう。しかし何よりも根源的な理由は、ガンガーが宗教的に尊崇され、汚染されているはずがない、という誤った慣習的思考ではなかったろうか。しかしまた、そのことに気付いたのも伝統的な寺院の僧侶であった。インド政府や外国からの援助の申し出があっても、当事者が気付かなければ運動は始まらない。教典の教えがいかにすぐれていても、それが即環境倫理になるわけではなく、そこで日常生活を送る当事者の再認識が重要であることを、ヴァーラーナसीーの事例は示唆しているといえよう。

中世ヒンドゥー教にみる

『地上の天界』説と環境倫理

橋本泰元

本稿は、デリーから約一四三キロメートル南南東に位置する